

Title	The Landscape in Hardy's Novels : Studies in Interrelations between Man and Nature
Author(s)	伊藤, 佳子
Citation	大阪大学, 2008, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49127
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	伊藤佳子
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第21689号
学位授与年月日	平成20年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化表現論専攻
学位論文名	The Landscape in Hardy's Novels: Studies in Interrelations between Man and Nature (ハーディ小説における風景：人と自然の相互関係の研究)
論文審査委員	(主査) 教授 玉井 暲 (副査) 教授 森岡 裕一 准教授 服部 典之 准教授 片渕 悦久

論文内容の要旨

本論文は、19世紀後期から20世紀初頭にかけて活躍したイギリスの小説家トマス・ハーディ(1840-1928)を取り上げ、その六大小説と称されている主要小説を、それぞれの作品における人と自然との相互関係を考察することを通して、ハーディ小説における風景描写の特質を明らかにした研究である。論文は、序章、本論6章、および結論から構成されており、全体で英文178頁、和文400字詰め原稿用紙に換算しておよそ455枚の論文である。

まず、序章は、ハーディ小説においては、風景が単なる地勢描写に留まるのではなく、登場人物と密接に結びついて物語展開に深く関わっているとの全体的な展望を述べたあと、論の対象とする作品として、『はるか群衆を離れて』(1874)、『帰郷』(1878)、『カースタブリッジの町長』(1886)、『森林地の人々』(1887)、『ダーバヴィル家のテス』(1891)、『日陰者ジュード』(1895)からなる六大小説を紹介する。

第1章では、『はるか群衆を離れて』において、ロマン派詩人が愛用した、自然風景を捉える擬人法のひとつである‘pathetic fallacy’(感情による誤謬)が使用されているが、その一方で、この誤謬を脱して客観的事実認識に立ち返る描写も取られていることを指摘する。そしてこの‘pathetic fallacy’からの解放とパラレルな関係をもって、女主人公バスシーバの歪んだ現実認識の矯正が描かれていることを明らかにする。

第2章では、『森林地の人々』はハーディのパストラル的物語の系譜に属しているが、他の初期作品と比べると田園世界に著しい変容が見られ、また田園的価値を体現するジャイルズには性格的欠陥が描写されており、田園的世界の喪失は産業化などの外的要因のみならず、内的要因にもよることを説き明かし、論者は、このパストラル的世界の崩壊の意味を問うているのがこの小説であると述べる。

第3章は、『帰郷』には、その風景や主要人物の描写においてヘレニズム的なものとヘブライ的なものの対比が見られることを指摘し、この二つの価値観の相克が小説の舞台エグドン・ヒースで繰り広げられると述べ、そして、プロットの表層ではキリスト教的人生観が勝利するように展開するが、異教精神がエグトンの地に息づいている叙述も、ハーディの後期作品を考慮に入れると重要な意味をもっていると説いている。

第4章は、『カースタブリッジの町長』では、カースタブリッジという町が、「緑のテーブルクロスの上のチェス盤」に喩えられる特徴、ローマ時代の廃墟の残存、無法地帯「ミンクス通り」の存在などを含んでいて、この風景・地勢

それ自体が、主人公ヘンチャードの人生において展開する運命と相似関係にあることを明らかにしている。

第5章は、『ダーバヴィル家のテス』にあつては、テス、アレック、エンジェルらの主要登場人物たちが関わる家や建築物が、旧世界、新世界、倫理・道徳性などを表わす象徴的意味を帯びて叙述されていることを説き明かし、ハーディのこの建築と思想性との親密性を信じる考え方の由来を当時のゴシック建築の理論家たちのなかに探っている。

第6章は、『日陰者ジュード』において鉄道が前景化される描写が取られていることに注目し、その意味を考察する。男性主人公ジュードの存在にまつわる個人的・社会的不安、夫婦間の不安は、たえざる移動となって小説空間に表わされ、鉄道は、こうした世界を取り巻く状況を表象するものとして機能していることを説き明かす。

結論では、ハーディの六大小説では、人と自然との関係が、自然物への感情移入、人と土地が形成するエートス、人と風景との相似、環境からの人間の疎外など、さまざまな相を提示して描かれていることを再度力説して論を閉じている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、トマス・ハーディの六大小説と称されている長編小説を取り上げ、それらの小説空間に描かれる風景を綿密に分析することを通して、人と自然との相互関係が小説のテーマと密接に結びついて重要な意味をもっていることを明らかにした力のこもった論文である。ハーディの中期小説から後期小説への展開を田園的風景の変容・変質、さらには風景の喪失として大きなパースペクティブのもとに捉えることによって、ハーディの本格的小説の群像に新鮮な統一的読解の視角を鮮やかに提示したことは大きな功績である。特に、六大小説のうちの前期4作と後期の『テス』『ジュード』とのあいだに、風景の表象において注目すべき転化が生じていることを見る読みは興味深い指摘である。また、各小説の細部描写のもつ意味を丁寧に読み解き、それをもとに論を構築していく手並みは実に手堅くて、各章がバランスのとれた作品論となって仕上がっているのも本論文のもつ大きな魅力である。

ただし、本論文において問題がないわけではない。‘landscape’の表わす内容が自然風景から、さらに異なる次元の空間、世界、環境なども指して用いられる場合があつて、その概念の輪郭がやや不鮮明になるのが惜まれる。また「風景論」をめぐる先行研究や批評家の論などにも言及してハーディ文学における「風景論」の成り立つ意味をもっと掘り下げてもらいたい気持ちも残る。また、ラスキンやピュージンらの建築観を論に導入するに当たってはより本格的な議論が求められよう。

しかし、それらの点は望蜀のごときのものであつて、本論文の本質的な価値を損なうものではない。よつて、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。